

鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ (34)

前橋市 富山 弘毅

江南の水郷古鎮の旅

長江クルーズを中心とする8日間のツアーでも、私の期待する「鬼瓦」にはほとんど出会えませんでした。

鬼面か人面かと思える丸瓦を2個ほど、発見しただけでした。形でも色でも装飾性豊かで芸術的な鬼龍子や飾り瓦は、ため息が出るほどすばらしかったのですが。

私は、中国では「鬼瓦」には会えないに違いないと思い始めていました。現役の鬼瓦はせいぜい朝鮮半島どまりで、中国にまで遡るには無理があるのではないかと、やはり韓国を徹底的に調べることが肝要だと、目を韓国に据えようとしていました。



それでも、4年後にやってきた3度目の訪中のチャンスでも、やはり屋根の上ばかり見ていました。

2006年1月、中国・江南地方を回る旅に妻と参加しました。三国志でも知られる江蘇省は、長江と淮河が東西に横断し、北京から杭州をつなぐ京杭大運河が南北に縦断するところで、豊かな水と歴史に彩られています。

そうした大小の運河が張り巡らされた蘇州、周庄などの水郷古鎮をゆっくり回る、ワールド航空サービスのツアーでした。中国の地方の歴史的建造物の屋根にどんな瓦が載っているか、興味津々でした。

蘇州の街と世界遺産庭園

上海からバスで一気に蘇州へ。「東洋のヴェネツィア」といわれる水郷都市です。にぎやかな観前街のホテルで1泊目を過ごし、翌朝、ちょっと早起きして、水の流れる街なかを散歩しました。

職業紹介所（ハローワーク）ではないかと思われる建物があり、数十人が行列していました。その日の仕事を求めているのでしょうか。



蘇州 早朝の行列 求職か？

その近くに大きな寺院があり、境内で大勢の中高齢者が太極拳をしていました。玄妙観という道教の寺です。道教の寺院はみな「観」というのだそうです。

寺には巨大な龍頭瓦（次回掲載）が載っていましたが、「鬼瓦」の類は見当たりませんでした。



蘇州 早朝、玄妙観境内で太極拳をする人びと

午前中、蘇州四大庭園の一つといわれる世界遺産の獅子林を見学しました。元の時代の末期に造園されたそうです。自然が創

り出した石の造形のみごとな数々に驚か
されましたが、建物の屋根にもすごい飾り
瓦が載っていて、感動しました。



獅子林 飾り瓦

有名な太湖にも行きましたが、雨・霧で
水面も見えませんでした。

午後はバスで10kmほどの、江南の庭
園の都といわれる水郷古鎮・木洩（もどく）
を訪れ、ゆっくり散策しました。

水が動いているのかどうかわからない、
ゆったりとした流れの小運河の風景も素
敵でしたが、ここでも屋根や壁の芸術作品
に心を躍らせました。



木洩 大棟の飾り瓦



木洩 棟端瓦（鬼龍子）



木洩 立体的な壁絵

拾得と楓橋夜泊の寒山寺

寒山寺（かんざんじ）は、蘇州の旧市街
から西に約5kmの地にあり、寒山拾得の
故事で名高い臨済宗の仏教寺院です。多く
の参拝者でにぎわっていました。

楓橋路に面しており、唐代の詩人・張繼
（ちょうけい）が詠んだ漢詩『楓橋夜泊』
（ふうきょう やはく）の石碑があること
でも知られます。私が幼少時に詩吟でそら
んじたこの漢詩の地がコースに入ってい
たのも、このツアーの魅力の一つでした。

現在の寒山寺は、清末の1906年（光
緒32年）に程徳全が再建したもので、そ
れぞれの建物はいずれも比較的新しいそ
うです。



寒山寺 五重塔

中央に大雄宝殿、周囲に鐘楼、鐘房、羅漢堂、碑廊があり、東側に寒拾殿、東端には普明宝塔（五重塔）があります。日中戦争の戦火はまぬがれており、1940年の日本映画『支那の夜』の挿入歌『蘇州夜曲』でも、寒山寺が登場します。

中華人民共和国成立後、2度にわたって大改修がおこなわれ、1982年には江蘇省人民政府により「江蘇省文物保护单位」に布告されました。



寒山寺 大棟の鬼龍子



寒山寺 大棟中央の飾り瓦 龍

『楓橋夜泊』（張継）

月落烏啼霜滿天、
江楓漁火對愁眠。
姑蘇城外寒山寺、
夜半鐘聲到客船。（姑蘇城＝蘇州城。B.C.500
春秋戰國時代に吳王の立てた城。城壁が残る）

この七言絶句は旅人が、蘇州西郊の楓江にかけられた楓橋の辺りで船中に泊まっ

た際、寒山寺の鐘の音を聞いたという様子を詠ったものです。

この漢詩を幾人もの著名な書家が揮毫した作品が碑廊にずらりと掲額されていました。私が見慣れていたのは庭に建てられている石碑の拓本で、多くの日本人観光客がお土産に持ち帰ったものでした。



漢詩『楓橋夜泊』の石碑。上部は龍の造形。筆者。

「よく観ればさほどでもなし寒山寺」という川柳もあるそうですが、高僧の寒山拾得がつくったという仏像が納められている寒拾殿、だれでも自由に3回ずつ撞くことができ鳴りっぱなしの鐘楼など、感慨深い寺でした。

寒山寺では、毎年の大晦日の除夜の鐘の音を聴くと10歳若返るといわれており、最近では誰が撞き手の一番手となるかをせりにかける行事が恒例となっているそうです。

この境内に接して江村橋があり、その向こうが楓橋景区で遺跡を整備し復元したもののようでした。

唐の時代に、ここに停泊した船の中で都落ちした詩人・張継が旅愁のために眠れぬ

まま鐘の音を聞いて作詩したのかと、ちょっとだけ思いをめぐらしました。



楓江にかけられた江村橋のほとりで 妻と

運河とともに暮らす古い街

午後、同里鎮へ行き、名物の湯麺を味わったあと、退思園、同里三橋、明清街などを散策しました。

車の通らない狭い道、軒を接する古い家々、生活道路代わりに水路を小船で行き来する人びと、自分で採った野菜や魚を道端で売る男女……。運河が迷路のように流れる古い街を大事に保存しつつ、人びとがそこで暮らしている様子を見て、日本ではとくに失ってしまった人間の大切な営みがここにはあると、強く思いました。

古運河を周庄へ向かう途中、地元の小楽団が二胡（にこ）などの民族楽器を演奏してくれました。船は直接、周庄のホテルへ入りました。



(上) 水郷・周庄の運河風景
(左) 小運河で野菜を洗う女性



周庄 古い建物の大棟を飾る瓦

周庄は11世紀に周という名の人が田畑13haを全福寺に寄付したところから付いた地名で、運河を利用した商業が栄え、いま人口12万余。明代、清代の古民居がたくさん残り、小運河を縦横に使って人びとはゆったりと暮らしています。

天秤棒を担ぐ女性の姿もあって、「早く！早く！」とせきたてられ、便利さを追求するような雰囲気は、まったく感じられません。

住民が愛用する街の食堂でおかゆの朝食を取りました。庶民の暮らしぶりに少し触れた感じがしました。（つづく）